九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

我が石炭生産に従事した頃(下) : 炭堀りし日々の記録

長弘, 雄次
九州共立大学工学部

https://doi.org/10.15017/13717

出版情報 : エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 12, pp.156-171, 1983-06-30. 九州大学石炭研究資料センター
バージョン :
権利関係 :

我が石炭生産に従事した頃（下）

――炭掘りし日々の記録――

長弘雄次

目　次

一、はじめに
二、修業時代
㈠、空襲下の授業
㈡、炭鉱の見学
㈢、石炭増産運動
㈣、炭鉱の実習
㈤、巣立ち
三、炭鉱勤務駆け出し時代
㈠、入社時の炭鉱に対する感懐
㈡、炭鉱の職種、業務
㈢、見習係員
㈣、採炭発破係員
㈤、採炭係員
㈥、保坑（支繰）係員
㈦、調査研究業務
㈧、独身寮の生活（以上、前号）
四、石炭の傾斜生産（以下、本号）
㈠、傾斜生産に至る経緯
㈡、主食、生活用品の特配
㈢、炭鉱労務者の増員
㈣、輸送力の増大
五、炭鉱の労働運動
㈠、労働組合の結成
㈡、レッド・パージ
㈢、炭労六十三日の長期スト
㈣、ロック・アウト
㈤、三池斗争
㈥、合理化反対斗争
六、炭鉱と保安
㈠、地下労働と事故との斗い
㈡、鉱山保安法の制定と保安機器の整備
㈢、炭鉱の事故について
㈣、保安運動、安全祈願
七、エネルギー革命と機械化、合理化
㈠、其の背景
㈡、機械化、合理化の推進
八、炭鉱の終焉
九、おわりに

四、石炭の傾斜生産

(一)、傾斜生産に至る経緯

茲で敗戦後の傾斜生産の方式について述べてみたい。

戦いに敗れた我が国は戦時中の人手不足を補っていた韓国人、中国人の帰国、俘虜の解放、徴用者の帰郷が相ついだ。労働力の不足によって昭和二十年十月には九州の出炭高は同年四月の一割代に激減した。そのため政府は石炭緊急対策で主食一日平均五合の加配を行った。福岡で学生生活を送っていた私は、二、三合の度々遅配される配給米では満足出来ず、中鶴炭鉱の労務者不足による出炭減の話を聞き、仲間とはせ参じた。このことは已に前述した通りである。外地からの引揚者、復員者は博多、長崎を問わずつぎつぎに空襲で焼野が原化した日本内地を目指した。毎日引揚船が着くたびに列車は鈴なりの盛況で、人々は窓から争って乗りおりした。まさに戦後一～二年は無法治国の観があり我々学生の立場からも日本の国の前途に対しどのようになるのだろうと危惧の念をもった次第である。

昭和二十二年十月学校を卒業して炭鉱に就職した当時は、日本の鉄鋼などの基幹産業のエネルギー源確保のための石炭の増産を何にもまして国の第一の施策とする、所謂傾斜生産による復興の鎚音がなりはじめていた時期であった。

月給千二百円也の辞令とともに坑務係を任ぜられた。現在ならば一、二カ月の研修を行うべきところ、一、二日の採炭現場の見学もそこそこに、西も東も分らぬまま、石炭生産の第一線で朝早くから炭じんにまみれた坑内生活がはじまった。炭鉱は猫の手も借りたい許りで、労務係は九州南部の宮崎、熊本、鹿児島や四国、山陰地方まで、採炭夫の蒐集に手分けして飛びまわった。

かくして二十一年に二千万噸にまで減産した石炭も二十五年には三千八百万噸の年産量まで回復した。

とにかく日本の敗戦後の世相などかえりみる間もなく、毎日坑内にもぐっては採炭夫と一緒になって石炭の生産に精一杯働いた。

(二)、主食、生活用品の特配

敗戦の昭和二十年秋から二十一年にかけての食糧危機は深刻であった。特に二十一年は未だ学生の身であったが、主食の遅配により学校の講義も休講となることが多く、我々学生もリュックサックをかついで、熊本の田舎にまでさつま芋の買出しに出かけた。炭鉱に入った途端加配米があるため食糧事情はよく、他の学科の学生に羨やましがられた。

特配物資として米のほか酒、煙草、作業衣、アメリカ進駐軍から放出される缶詰などが支給された。坑内係員の卵として勤務していた私もその恩恵にあずかった。

毎日の作業終了時に坑内夫に手渡す伝票はその坑内出勤の証拠となった。それによって一カ月の出勤率の高い者は特配物資の加算があり、出勤率は可成り高かった。

ラヂオは「炭鉱の夕べ」を毎週特集で報送し、炭鉱の特配物資のPRを行った。そのため引揚者や戦災者が続々と炭鉱に集まった。毎週ラヂオで流される炭坑節はまたたく間に全国に広がり、人々が口ずさむようになった。

(三)、炭鉱労務者の増員

主食などのほか、炭鉱住宅が国の資金で次々に建設された。今までの炭鉱住宅は納屋と云われるほどお粗末で、四軒～八軒のハーモニカ長屋、しかも便所は家の外にあったので夜の用足しには難儀していた。ところが戦後建てられたものは炭住と称し、二軒続きではあったが便所も内便所で間取りも広く、一寸とした庭もあり、世間なみの建物

であった。人々は争って炭鉱に集った。全国的にみると敗戦時二十三万人の労務者が二十三年には四十五万人と倍増していることからも当時の世相の一端が窺われる。

坑外と坑内の作業では賃金に可成りの開きがあったゝめ、危険と承知でも坑内の希望が多かった。中には朝鮮、満洲で可成り裕福に暮していた人もおり、大阪などの戦災地で手広く商売をやっていた人、そして元警察官や官吏のほか、学歴をかくして（当時学歴のある人は坑内作業員としては採用しなかった）入所してきた人もいた。

坑内には色々な職種があった。採炭夫や掘進夫が作業するためのスコップやつるはしなどを預かる「道具番」という職種もあった。その一人に年の頃は四十すぎの品のよい人がいた。聞いてみれば何でも外地で教師をしていたとかで、引揚げて郷里の都会に帰ったが、戦災で親類縁者は離散し、やむを得ず生活の糧を求めて炭鉱に来たとか。その物腰に戦争の被害者の悲哀を感じた。その人は昭和二十八年頃世相が落付いてきて、郷里に帰って行った。その姿が未だまぶたに焼付いているが、その後どのような人生を送られたか知るよしもない。唯幸あれと祈る許りである。

ともあれ種々雑多な人々が集った結果、炭鉱のもつ後進性にふれ、労働運動に入り、炭労という強大な組織の担い手になった人もあらわれた。

夫々の色々な生活体験者集団によって、急速に炭鉱はその姿を変えて行った。しかし地下労働という宿命的な危険な作業環境の中では、矢張り鉱山一家というムードがそこはかとなくただよい、採鉱エンジニヤーの卵として日の浅い未経験者にもそれが感じられた。

しかし外部から入って来た戦災者や引揚者の相当数は、戦後五～六年を経て講和条約締結など、世の中が落付くにつれて故郷に転出した。そのため労務者の移動がはげしく、熟練者不足に悩まされ、其の後の機械化をすすめざるを得ない一因ともなった。

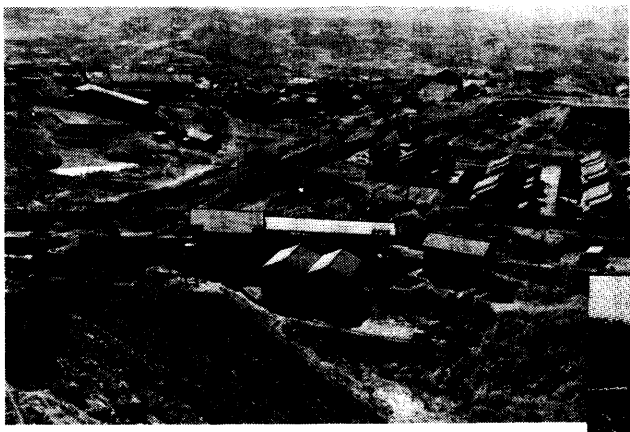
㈣、輸送力の増大

筑豊の石炭は主として若松、苅田等から船便で京阪神方面に輸送された。丁度名古屋から横浜までの間が九州炭と北海道炭との競合地区であったようである。各炭鉱は貨車不足のため其の取り合いが行われた。私の勤務している炭鉱は田川の奥地にあるため配車が予定通り無く、貨車係は駅の配車係に頭を下げてまわるなど苦労した。

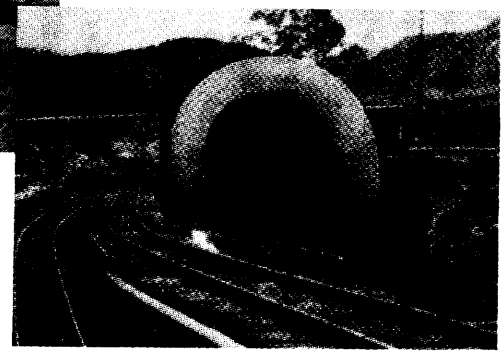
戦後二千万噸に減少した出炭量は年産五千万噸に向って国策として増産が要請され、貨車は日夜筑豊の数百の炭鉱から若松、苅田或いは全国各地の工業地帯に向って走り続けた。

北九州の煙突から出る煙は「七色の虹」という映画にまでなり、熔鉱炉は赤々ともえ鉄が次々と生産され、廃墟と化した日本の復興の支えとなった。「鉄は力なり」と云うが、当時は「石炭は力なり」という表現がぴったりとあてはまるかのように、筑豊炭田からの出炭は全国の約半数に近く、その筑豊の石炭が国の復興、近代化を担っている感があった。私もその石炭生産に従事している一員として毎日坑内の黒々と光り輝く石炭層を相手に胸をはって、黒ダイヤ掘りに若い情熱をぶっつけて毎日を過した。坑口からは石炭が昼夜をわかたず、搬出され、操車場を経て選炭機に送られ、洗炭の上、各地に輸送された。石炭を選炭したあとの汚水は真黒な流れとなり遠賀川を黒く染めた。それが当時の石炭増産のあかしでもあった。次の写真は、石炭が斜坑から捲上げられ、坑口操車場を経て選炭場へ送られる状況で、石炭増産時期の力強さが感じられる。

国鉄の客車不足で人々は貨車に簡単な板の座席を取り付けた即席客車に乗り、それが敗戦後しばらくの間、石炭列車「セム」の走る合間に遠慮しながら走った。筑豊の空をSLのあげる石炭の煙が覆った。



古河大峰鉱業所萬歳坑
坑口操車場（左上が選炭場、右側は社宅）
（昭和23年7月）



大峰鉱業所萬歳坑坑口
（昭和23年7月）

私は筑豊本線の冷水トンネルを通って博多に行った頃の思い出を忘れることが出来ない。

当時篠栗線はトンネルが開通しておらず豊前川崎から博多にゆくには、田川線（現田川伊田駅乗換）－伊田線（直方駅乗換）－筑豊本線（折尾駅乗換）－鹿児島本線（下り博多駅下車）で行くか又は田川線（現田川後藤寺駅乗換）－後藤寺線（新飯塚駅乗換）－筑豊本線（原田駅乗換）－鹿児島本線（上り博多駅下車）で行くかの他はなかった。バスも未だ博多行はなく、全く一日がかりであったが、距離的には原田駅まわりが多少近く、博多に用事がある時はよく冷水越えをしていた。

しかし長いトンネルの難所である。SLはあえぎあえぎ急勾配の線路を登り、トンネルに入った。油煙が入るので窓はしめるが、木製窓の隙間だらけのおんぼろ汽車である。むし暑さと窓の隙間から容赦無く入る煙の為に息苦しく、タオルなどで鼻口をおおってその苦痛に人々は堪えた。しかし毎日坑内に入って石炭を相手に炭塵で真黒になって働いている身である。汗が出ると肌の毛孔から炭粉が吹き出した。汽車の油煙と両方でシャツの襟元は真黒に汚れた（後日炭鉱の閉山で坑内生活から足を洗ってからも三年程は、汗をかいたときに、毛孔から炭粉がふき出してシャツは何時も汚れた）。

石炭採掘に従事していた者でも、汽車の油煙には閉口した。矢張り電化、ディーゼル化は必然的なものであったろうか。今当時活躍した筑豊を網の目のように走る国鉄の線路、その大半は赤字路線として、何時かは廃止される運命にあるという。栄枯盛衰世のならいとは云え、その線路の数々が日本の近代化と敗戦後の復興を担って活躍した往時を偲ぶとき、何か一抹の淋しさと経済性のみでは割切れない思いを抱くのは、過ぎ去りし日の郷愁として片付けられない、石炭との出合いの深さであろうか。

五、炭鉱の労働運動

(一)、労働組合の結成

現在でこそ水と空気のように、企業組織のあるところには労働組合は当然のことゝして人々に受入れられているが、敗戦直後はG・H・Qの指示で結成されたものの、その運営も手なれず、当事業所も私が入社した昭和二十二年頃は、やっと軌道にのりつゝある状況であった。炭鉱の労働組合は現在の総評系の日本炭鉱労働組合（炭労）と同盟系の全国石炭鉱業労働組合（全石炭）に略二分されていたが、当炭鉱は炭労系に属し、鉱員側の労働組合と職員側の職員労働組合の二本立ての組織として運営されていた。私の所属した職員組合は初代の組合長は炭鉱長であった。当初は経営管理者層との区別がされず運営されていたが、矢張り労働組合法の主旨にもそぐわないことから、課長職の管理者層は非組合員として区別された。

当事業所では私立の小学校を経営していた関係から、その先生方や病院の医師なども職員組合員として行動したものゝ、その意識はもともと与えられてつくったゝめに、数年の間は組合意識は感じられなかった。

(二)、レッド・パージ

敗戦とともに、日本軍国主義解体の諸施策を重点的に進めてきた米国の占領政策は、二十五年の六月の朝鮮動乱を契機として、労働組合結成に積極的であった従来の方針を方向転換し、昭和二十一年二月一日の交通ゼネストや電気産業労働組合などのゆきすぎ、又炭鉱における職場秩序の乱れも一部生じ、是等は共産系の主導によるものと、所謂レッド・パージと称して、全国的に共産党員及びそのシンパを職場から締めだす強権がマッカーサー指令で行われた。

私は丁度採炭係員としての勤務も漸やく板につきはじめた頃であったが、採炭員のA君は姿を見せなくなり、不審に思い労務係に問合せしたところ、レッド・パージにかゝって強制退職させられたとのことであった。職場では共産党員の素振り一つせず、仕事振りも真面目であったのにどうしてであろうと思ったが、色々聞いてみると職場外の情宣活動を可成り積極的にやっていたようであった。しかしこのレッド・パージは占領軍の絶体権力のもとで行われたので組合も何等反発することは出来なかった。しかしどうしてパージになった人のリストが出来上っていたのか、現場の第一線で働いている者にとっては何等知るよしもなかった。炭鉱全体で誰それがパージにかかったと可成りの数がうわさされたが、何等反対も出来ず、新聞などの言論も全く沈黙を守るのみであった。

後年裁判問題となったが、三十年を経て現在は風化しつゝあるようだ。しかし是を機会にパージで退職した者の中には、その後自らの信ずる政治政党をバックにして町会議員となって活動を続けているものもいる。この事件は当時戦前の封建的な職場から急に自由化された労働組合の急激な尖鋭化が一時停滞を余儀なくされたようでもあった。

(三)、炭労六十三日の長期スト

坑内から掘り出され、選炭場で商品化された石炭は戦時中そして戦後暫らくの間販売価格は統制されていたが、漸やく経済復興のきざしが出はじめた昭和二十四年頃から自由販売化されるに至り、企業の活動は活発となってきた。

而るに二十五年六月にはじまった朝鮮動乱は、未曽有の特需景気をもたらし鉱工業生産は一気に戦前の水準を突破することゝなり、石炭の需要は急激に増加した。そのため炭鉱では公休日も大出しと称して月に2回程の公休出炭を行い、生産に大童であった。しかし炭鉱とい

うものは直ちに出炭を増大させることは出来ず、坑道の掘進による炭量の確保など数年の準備を必要とした。そのため石炭不足になり全国的に炭価は高騰し、石炭界は未曽有の高収益を挙げ、筑豊の飯塚、直方、田川の三市町は特需景気にわいた。又小炭鉱の鉱主は福岡市にまで出かけ、札束をばらまき話題となった。

この頃から現在の春斗のはしりとしての毎年のベースアップの交渉が、労使の上部機関で行われるようになったが、特需景気のあとを受けて、昭和二十七年の高額アップの交渉は労使双方譲らず、十月よりの石炭大手会社十七社のストは遂に六十三日間の長期ストとなり、参加人員延一千百万人に達し、石炭の減炭量は約六百万噸に達したといわれた。

そのため戦後やっと復興の緒についた許りの日本経済は電力用炭の不足による所謂ローソク停電などと云われるほどの電力不足により、たちまち混乱の度を加え、外国炭の輸入や石油へのエネルギー転換が急速に行われはじめた。しかし労使双方交渉が進捗しないために十二月に至り労働組合調整法の強権発動によりやっとストは終止した。

炭鉱は地下における特殊作業であり、地圧との戦いである。そのため採掘場は常に移動することによって其の保持が保たれているが、長期間作業を休止することは、作業場の破壊に繋がることにもなり、採炭技術関係者は早期解決を望んだ。何しろはじめての長い採炭切羽の休止である。予知せざる危険に対して維持補修のための保安作業要員を組合と協議して、極力その保持を図った。まだ一度も経験していない地圧との戦いに私達坑内技術者も知恵を傾けてそれぞれの立場で努力した。

坑道を縦横に走る炭車運搬用のレールは赤くさび、炭車の走らない坑道はみるみる地圧により、盤がふくれて坑道が狭少となり、その整備に大童であった。毎日炭車が石炭を積んで走っているときには、その重量により地圧を押えていたことに気付いたのはストによる副産物であった。

幸い主力の採炭切羽は二十五年頃からはじまった機械化のため天盤よりの地圧を支えていた木の柱から鉄柱に変っていたことは幸いであった。そのため過去の経験から考えていた採炭切羽の危険は二ケ月を経て十分保持することが出来た。しかし長く放置すると空気中の酸素の働きで石炭が酸化し所謂自然発火のおそれが出てきたので、一部の切羽はやむを得ず保安出炭と称して切羽の移動を図った。

ストの期間中わずかな保安要員としての作業があるのみで、殆んどの鉱員は日給制のため収入がとだえた。そのため建設現場の日雇い人夫の作業や都会に出て資金カンパに出かけたりして生活の資を求めた。

職員組合員も交代で出勤したが、ストが長びくにつれてその立場上からこのまゝ推移することは企業の崩壊に繋がるとして、組合大会を開きスト終止の一ケ月前にストから離脱した。このため其の後労働組合と職員組合との対立が生ずるようになった。

筑豊の山奥の炭鉱地帯で毎日の坑内採炭作業に従事していた者にとって、この長期ストを転機として、已に芽生えていたエネルギー革命が急速に進行する起爆剤となった歴史的な意義を理解することは想像も出来ないことであった。このストによって、加速的に石炭産業は石油との競合に敗れる斜陽化の道を辿ることゝなったわけであるが、私たち炭鉱で生活する者にとって閉山迄の長くもきびしい苦斗のあけくれがこれから始まるのであった。

四、ロック・アウト

六十三日の長期ストが終ったあと一年もたゝぬうちに朝鮮動乱が終結し米国の特需が一段落すると、今度は不況に見舞われた。石炭の好況は明治以来十年に一度しかないと云われていたが、炭鉱主が栄華の

夢をむさぼったわずか一～二年後の不況到来に各地の小炭鉱は没落し、私の勤めていた大手系の炭鉱も人員整理の波がおしよせてきた。一緒に入社したO君は、体をこわして一年許り療養の身であったが、容赦なく整理の波にのまれた。爾後二～三年毎にエネルギー革命の進行と共に整理が繰り返された。

日本最大の三井三池炭鉱では指名解雇問題に端を発して一一三日の長期ストが行われたのもこの時期であった。

私の勤務していた炭鉱では私立の大峰小学校を経営していた。筑豊各地では貝島炭鉱をはじめ炭鉱は明治、大正、昭和にかけて、矢張り一つの文化的資産をもっており、大手炭鉱は従業員の福利厚生の一環として、不便な山奥の中で封建的と云われながら従業員の子弟の教育という一つの看板をもって小学校を経営しているところも多く、それが地域の発展に寄与していたこともまた側面的事実であった。

しかし不況合理化の波の中で、段々経済的に学校を経営することは困難となり、当炭鉱でも町営に移管することがすゝめられた。

一緒の寮にいた先生方はこの町営に反対した。一企業の経営する学校より公立の方がよいのではないかと私達門外漢は思ったりしたが、恐らく給与ベースその他がよかったのではないかとあとで考えたことであった。

何れにしても学校を分離するということで職員組合大会が開かれた。その総会で移管の賛否について教員を組合にかかえている立場から議論が活発に行なわれた。

昭和三十頃の当炭鉱の従業員五千人、職員組合員五百人程度であったが、総会の議論は沸騰した。学校の先生方、特に若い女子の先生方は感情的に切々と如何に教育が子第に大事であるか多くの組合員の前で訴え、教育のためにはたとえ、炭鉱が苦しくなって坑口の一つ二つを閉鎖しても学校は残すべきだと涙ぐんでまくしたてた。私企業として教育までやらなければならないか疑問をもっていた大多数の組合員の賛同を得ることが出来なくて、組合側も町立移管に同意した。

こゝでこのような教育のことを述べたのは、筑豊産炭地においては炭鉱は文化的な地域のリーダーでもあったし、又水道なども殆んど炭鉱水道によって各市町村の炭鉱以外の人々も恩恵を浴しており、このように日常の生活が石炭を基盤として動いていたことをのべたかったにほかならない。後日筑豊のすべての炭鉱の閉山後、炭鉱インテリ者層の子第が県外に大量に転出した結果、筑豊地区の高校の大学進学率は一時急激に低下したといわれるが、炭鉱の地域に果した文化性の一端が窺える。

しかしそのような地域に対する貢献も石炭不況の前には段々と手を引かざるを得ないようになっていった。それとうらはらに、労働組合は戦後の民主主義の広まりのもと遂次組合意識も急激な高まりを見せ、昭和三十一年の賃金斗争においては、六十三日ストの経験から組合員の生活に影響を与えないような部分スト方式を新戦術としてあみだした。

運搬部門のみのストによって生産がストップし、経営者側は大打撃をうけ山ネコ争議であると非難した。そのための対抗手段として、裁判所に申請して事業所立入禁止のロック・アウトで対抗した。

中間層の職員組合はストをせず会社側についた。そして一カ月位の籠城覚悟で事業所に食糧の搬入をはじめ、坑内にも貯蔵を計画した。労働組合側の幹部は鉄線ではりめぐらされた鉄條網をかいくぐって、通用門の入口で寝ころんで食糧をのせたトラックが事業所内に入るのを体をはって阻止しようとした。

又組合側は強制就労して自主的出炭をしようとした。そのため坑内入坑に使用するキャップランプを手錠を使ってたばねて動かせないようにするなど緊迫した空気が労使双方の中に流れた。私達職員組合員

は徹夜で事務所の中に頑張りその暁の入坑劇を体験したが、大事に至らずストは中止されこの問題は労使のトップ交渉にゆだねられた。二十数年たった今そのときの異常な光景を思い出すと、エネルギー革命におわれはじめた炭鉱に生活していたときの非劇を感じる次第である。

ともあれ、中間層である我々採鉱技術者は生産場確保の中でゆれ動いた。これから三十五年頃までの三池斗争にゆきつく四～五年は、エネルギー革命に逆行するかのように労働組合が対決姿勢を強めた時代であったが、日本経済は「戦後は終った」とする昭和三十一年以降の技術革新、高度成長の幕明けの時期でもあった。

しかし私たち炭鉱マンは筑豊炭田の一隅で経済の大きな流れを知る由もなく、唯如何に石炭を採算ベースに乗せて採掘するかだけを課題として日々の生産に励むのみであった。

(五)、三池斗争

昭和二十七年の長期スト以来大手炭鉱労働組合の上部組織である炭労は経営者側に対して労働條件のアップの要求で対決姿勢を強めて行った。

特に三池炭鉱労働組合は石炭の炭層條件のよいことから、独自に職場斗争という職制吊し上げの圧力による労働條件引上げの方向を打出し、大衆行動を常時繰返した。

各炭鉱もその余波をうけて、私達係員はその末端最前線における大衆行動に日常さらされた。当時最も尖鋭化した炭鉱として、三井三池、杵島、そして自分の勤務している古河大峰が炭労の三羽烏の異名をとった。

人間の群集心理は恐しいものである。今当時を振返ったとき昭和三十～三十五年頃の異常な炭鉱の雰囲気を今だに忘れることが出来ない。

毎日々々どこかの職場で賃金交渉、労働條件の交渉が大衆行動として係員の吊し上げの形で行われた。頑強にその要求に応じない係員に対してはその家庭にもいやがらせをした。そのため私の妻もノイローゼとなって子供をつれて故郷の実家に帰ることも屢々であった。

山元においては東京本社に対して断固たる処置を要請したが、現実に直面しない認識の違いと、ストによる損害をおそれてそのままずるずると各炭鉱とも放置されることが多かった。

炭鉱は閉鎖的な社会である。労働組合は婦人を組織して炭婦協として動員した。この様な状態が四～五年続くと正常な状態に対する判断が分らなくなった。しかしこの点は立場が変ると何とも云えないが偶々私が職制の末端に位置していた状況から記述していることであってどちらかが正常か一概に決め難い。がこれが当時の係員としての立場からみた状況であった。

以上の様な様々な光景が展開されたが、経営者側から云えば「サボタージュによる生産の意識的低下」であり、労働者側から云えば「戦前から引続いた抑圧された労働條件の改善、職場の民主化」ということであった。三井三池の場合は指名解雇の強硬手段をとった。この争議は当時の安保斗争とからんで政治問題化し、総資本対総労働の対決と云われたが、二八二日に及ぶ長い対決は中労委の斡旋により解決した。

是等により益々エネルギーの石炭離れは決定的となり、以後炭鉱はなだれ閉山への道を歩むことゝなった。

(六)、合理化反対斗争

三池斗争と前後して、各炭鉱とも非能率炭鉱の閉山とビルド鉱の再建に必死の努力をした。私の所属する炭鉱の炭層條件は比較的良く、その為組合側の労働條件改善は強くなったわけであるが、それでもドイツからのコンベヤーや採炭機械の導入を図り能率の向上を図るほか、

それに伴う標準作業量の設定、職場規律の確立など現在国鉄再建の一方策として掲げられている諸項目について今から二十余年の前において問題となっていた。この頃は採鉱技師の卵も入社して十数年、管理職の末端におり、労働組合を相手に団体交渉の一員として協議し、そして採炭現場の機械化の推進に必死の努力をした。

丁度この時期は各炭鉱とも運搬、通気の合理化による炭鉱若返りの妙薬として大型立坑の掘さくに競って巨額の設備費を投入した。当炭鉱も数百米の坑内盲立坑の掘さくを鋭意進めて生産能率の向上を目指した。しかし炭鉱技術者の考えている以上に、廉い石油の輸入の増大により各需要者は石油エネルギーの転換の速度を早めて行ったようである。

かくして三池斗争の頃まで労働政勢に押され続けていた経営者側がエネルギー革命の深刻さに気付きはじめ、度々のストによって増え続けた赤字が解消出来ないと判断したときに、炭鉱に対する経営意欲を急速に失ないはじめ、その立場が変った。

私のところの炭鉱も昭和三十五、六年頃になるとストをやって休業しているときの赤字よりも、操業しているときの赤字の方が大きくなった。

資本の論理は冷酷である。閉山をかけて労働條件の改定、人員整理を打出した。組合は合理化反対のストを繰返えしたが何等経営者側に痛手は与えず労使の力関係は逆転し、数百の炭鉱をかゝえる筑豊では次々に閉山が続き、ついに十三年間勤務した大峰炭鉱も閉山縮少の上、昭和三十八年四月に第二会社として発足する運命に立至ったわけである。

六、炭鉱と保安

六、炭鉱と保安

(一)、地下労働と事故との斗い

我が国の石炭は地表に近い露頭の石炭を除き大半が地下に賦存しているために、坑内における災害は石炭産業が脚光をあびて以来、落盤、出水、ガス炭じん爆発等数限りなく発生した。それによって人命は勿論のこと炭坑そのものが閉山に追い込まれること、最近では北炭夕張新坑の例をあげるまでもなく、明治初期以来事故との斗いの歴史でもあった。

敗戦後は石炭増産の国家的要請に答えるべく各炭坑は懸命の努力をしたが、炭層は筑豊では傾斜十度～二十度で地下深く埋蔵されているために、一年で作業場は一〇～一五米ずつ深くなるといわれ、私の勤務している炭坑でも昭和三十年頃には已に地表下七百米以上にもなり地圧の影響は勿論のこと、地熱による坑内温度の上昇で一～二月の厳寒期でも摂氏三十度を超えた。

ガスも遂次増加の傾向があり、通気の改善のための通気専用立坑を必要とした。

又他の産業と異なり、石炭の採掘に伴って毎日の作業場が移動して作業場の環境が常に変化している特殊條件は、道路の交通状況が刻々と変化しているように、採掘場で働いている作業者の注意力のみでは事故の防止が困難な実態があり、特に中小炭鉱では石炭増産の波に乗って乱掘が行われ易く事故があいつぎ、国家の法律による保安法が制定されるに至った。

(二)、鉱山保安法の制定と保安機器の整備

石炭産業の保安の確立と安全操業を目標として昭和二十四年鉱山保安法が制定され鉱山保安監督局が新設され国の炭鉱に対する管理が強化された。又炭鉱の操業には保安の責任者と、作業者を指導監督する

係員が国家資格を持たねば炭鉱業の生産を許可しないようになり、又採炭作業場の点検が義務付けられた。重要な施設の改廃は許認可制度となり、鉱業法による炭鉱の採掘計画（施業案と云う）は保安上の制限が加えられるなど事故の防止に国の施策が強化された。

我々係員は国家試験をうけてその資格を取得しなければならないため、業務の間をぬって勉学につとめ資格を得て生産に従事した。これは大手、中小炭鉱を問わず義務付けられたので保安意識も遂次向上して事故の減少につながった。しかし落盤、ガス爆発等の大きな事故は時折発生した。

保安機器も遂次整備されて行ったが、当炭鉱における改善状況は次の通りであった。

①作業員の服装の改善

(イ)坑内では照明のためキャップランプが帽子にとりつけられたが、従来の布製から金属製にかわった。はじめは重いので作業がしにくいと不平が出たが、段々なれるにつれて全員が着用するようになり、頭部の負傷が減少した。

(ロ)靴が地下足袋から登山靴のような頑丈な保安靴となった。そのためかけ出し時代のように短時日で破損することもなくなった。

(ハ)昭和二十二年炭鉱に入った頃はまだ一部裸体作業が見受けられた。それほど坑内は温度が高かったわけであるが、袖のついた作業衣や手袋の着用を義務付けるようにした。唯裸体作業はなくなったが、坑内温度が高いため長袖の作業衣や手袋の着用は仲々励行されなかった。従つて落盤によるすり傷などの負傷は仲々に減少しなかった。

②落盤の防止

当炭鉱でもドイツで開発された採炭切羽の天盤を支える鉄柱やカッペ（鉄の梁）が昭和二十五年頃から遂次木柱にとってかわり、落盤の防止に役立った。たゞし大きな地圧の来襲に際しては木柱が折れ曲るなどの前ぶれが仲々つかめないようになった、め思わぬ事故に遭遇することもあった。次の写真は、昭和二十五年頃、鉄柱カッペが導入されたときの採炭切羽の風景であるが、写っているのは若い新婚間もない採鉱エンジニヤーのM君で将来を嘱望されていたが採炭切羽で間もなく落盤事故のため背髄骨折の重傷をうけ、一年後病院で療養の甲斐も無く遂に石炭増産の陰で若い命を散らし、帰らぬ人となった。M君の御霊に合掌し、その冥福を祈るものである。

古河大峰炭鉱、勤務終了昇坑後硬山を背景にして
（布製坑内帽子をかぶって）　昭和24年7月

又三十年代後半には、水圧による鉄柱が開発され三池炭鉱等の先進大手炭鉱で使用されるに至り、現在操業を続けている炭鉱はすべて進歩した水圧自走枠など使用されている。

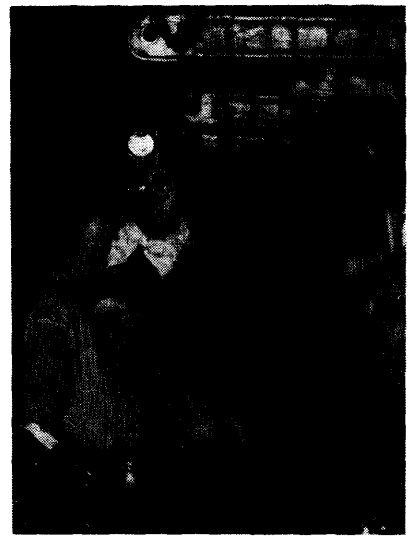
③ガス爆発防止

(イ)ガス検定器は、私の勤務していたガスの多いといわれる所謂甲種炭鉱では、ウルフ安全燈から理研式の干渉縞による精密検定器を使用することとなり、〇・一%までのメタンガスの測定が可能となった。

(ロ)坑内で使用する電気機械は検定合格された防爆型と称するものにとって代った。又坑内の末端にまでパイプを配管して空気圧さく機による圧さく空気を使用し、ガスに対する危険性の排除に貢献した。

(ハ)坑内が深くなってゆくのは筑豊炭田でも悩みの種であった。当大峰鉱も隣の三井田川鉱と同様昭和三十年に入り通気改善等のため立坑等の専用坑道の開さくに意を注いだ。

(ニ)深部採掘のためのガス抜ボーリングが実施されはじめた。



採炭切羽（鉄柱、カツペ、チェンコンベヤー）
古河大峰炭鉱一卸右三片払、
ウルフ安全燈を片手に（昭和25年3月）

(ホ)三十八年におきた三池炭鉱の炭じん爆発の大災害によって一酸化炭素防止用のガスマスクなどの携帯が義務づけられた。

その他保安のための種々の施策は当鉱をはじめ各炭鉱でも実施されたが、事故は大勢としては減少しながらも大災害が数年毎にくり返されたことは残念なことであった。

(三)、炭鉱の事故について

地下の暗やみの中の作業場である採炭切羽では、キャップランプ一つが頼りであり、作業場は石炭の採掘と共に常に移動しており、予期せざる地圧の来襲や、ガス、出水などによる事故が屢々起ったが、ジャーナリズムはきまって生産重視、保安軽視の見出しで炭鉱事故に対してセンセイショナルに扱うことが多かった。そのため一般の人々は炭鉱とは非常に危険な恐しいところという印象を増幅させた。たしかに炭鉱は事故と隣り合わせである。採鉱技師である私達の先輩はよく述懐された。「炭鉱在職中は事故によく悩まされた。今過ぎ去った過去を振り返り、よく今日迄無事に過してきたものだ」と。私は昭和二十年代の後半から、数百名の三交代の作業員をあづかって以来、炭鉱の現場にいる間、種々の事故に遭遇した。先輩の云っていた意味が実感として迫った。

この体験を書きつづっている今、爆発・坑内火災による閉山においこまれた北炭夕張新鉱、そして引続いて起きた三井砂川のガス突出、三井三池の炭車事故の報道記事を読むにつけ、炭鉱の生産現場から離れて已に十五年の年月を経ているにも拘らず、どうして事故が起ったか、その原因はどういうことかということよりも、事故が発生したときの被災家族のなげき、そして責任者としての関係採鉱技師の苦悩がまず先に脳裡をかすめるのである。

日本の劣悪な炭層の条件で、経済性と保安確保の両輪の間で生産を

続けなければならない日本の採鉱技術者の苦哀がひしひしと伝わり、よくぞ今日まで無事でこられたと神に感謝する気持と、数十年の炭鉱生活の中で苦楽を共にし、炭鉱の生産現場で不幸にも命を失った多くの亡き同志の御霊やすかれと、祈るばかりである。

当時採鉱技師として勤務中は三交代の作業を行っていたゝめ、よく夜でも自宅に電話がかゝってきたが、特に夜半の電話のベルが鳴るとまず事故ではないかと「ドキッ」としながら受話器をとった。わずか数秒の間にその日坑内作業場を巡回した箇所の状況が走馬燈のように頭の中をかけめぐった。「あすこは安全だった。あの危険と思われるところは事故防止の改善作業を指示していたが、その通りに実施しただろうか」などと思いめぐらすのであった。夜の十～十一時頃の電話は二番方と三番方の略交代時期に当り、作業の連絡打合せ事項が割合に多かったが、それ以外の夜半の電話は事故の連絡の電話が多く、何時でも炭鉱事務所に飛び出せるよう作業衣をそばから離せなかった。そのようなわけで電話のかゝってくる時間でその内容が次第に判断出来るようになった。家族も夜の電話に対して出ることをいやがった。この習性は後年石炭産業の第一線を離れてのちも、数年間のあいだは電話恐怖症的な気持が続いた。各炭鉱に勤務していた学生時代の友人も殆んど同様な状況で採鉱技師の宿命であったのであろうか。又炭鉱においては、労務係の事務系の人々も事故に対しては敏感であった。

それ程毎日神経を使いながら生産された石炭がエネルギー革命の前にひとたまりもなく消滅して行ったとき、日本の石炭産業のおかれた条件の悪さをしみじみと感じとった次第である。

大きな事故が起きた時は、その炭鉱は一斉に恐慌状態となり、新聞テレビの大々的な報導はその騒ぎを増幅させた。幸い勤務していた炭鉱は大災害の発生は閉山迄起らなかったが、それでも落盤や炭車事故等で年に数名の殉職者があった。被害者の家族は勿論のこと、その担当係員はその責任の追求が諸方面からなされ、本人のみならず家族、子供までもが小さな胸をいためた。

二十年代のある日、学校を出て二～三年の若い係員の受持に、落盤により一人の殉職者が出たことがある。その事故は特に其の係員の責任といえるものではなかったが、若い純真な責任感から退職を申し出た。私は採鉱エンジニヤーとして一生をかけた以上種々な場面に遭うことがあり、その尊い体験を今後に生かして事故防止に努めることこそ殉職者に対するはなむけではないかと論したが、その心情を思うとき、これから採鉱技術者としての苦難の道を歩むであろう後輩に対して幸あれと祈らずにはおれなかった。そしてそれはまた我が身にも云いきかせる言葉でもあった。

炭鉱は潜水艦や飛行機のように、炭じん爆発や坑内火災のような事故が起ったときは運命共同体的に尊い多くの人命が失われることが屢々ある。又その事故は作業員本人が如何に注意していても、他の一人の不注意や、交通事故のようにいきなり小児が小路から急に飛び出してきたり、対抗車が突然センターラインを飛び超えて突込んできたように、地下深い坑内の諸現象に対して現在の技術ではまだ予知し難いと思われる事故が往々にして起った。

坑内機械係をしていたH君は私と一緒に入社したが、当時は石炭増産運動の高まりの中で、人手が足りなく、機械の専門過程を修得したにも拘らず数年間は採炭係として私達採鉱エンジニヤーと同様毎日坑内作業のあけくれであった。彼の性格は非常に真面目で、岩石掘進係員として一サイクルの作業（穿孔、発破積込、枠入等）が終了しなければ作業を途中でやめなかった。よく残業をして独身寮に引揚げてきては意気揚々と今日も全面発破の作業を終ったと誇らしげに同僚に話した。そのため「全面発破」とあだ名がつけられた。

入社して六年～七年たったある日の夕方であった。勤務を終了して

家路に急ぎ、家内と二人で夕げの食事をしていた七時頃であったろうか、けたゝましい電話の呼び鈴に急いでかゝってみると、H君が坑内で負傷したとのことであった。何でも捲上機の矢弦に手を巻きこまれたとか。その傷の浅いことを願いつゝ、坑口に向って社宅から夢中で走って行った。

間もなく担架に乗せられて昇坑してきたH君を励まし、他の同僚と病院に急いだ。手術は二～三時間を要した。ロープによって左手子指を残して掌を斜めに切断されている重傷であった。遂にH君の左手は手首から切断することになった。そのときの心の痛みは他人事ではなかった。そして一日も早い回復を祈った。彼は数年後関東の当社の機械工場に転勤となり、本来の業務について各地区で勤務し、今は再び筑豊の地に戻り、関係会社の責任者として鉱害復旧の工事や建設関係の仕事で地域開発のため活躍している。

今彼と時折あって旧交をあたゝめているが、左手は義手をはじめ健康体の人と何等変りなく笑顔で昔の石炭時代の思い出を語りあう。が今でも冬の寒いときは傷口が痛むという。

負傷したあとのH君の肉体的苦痛と心の痛手は私には計り知れない大きなものであったに違いないが、彼も亦石炭産業の犠牲者の一人であり、身近の友人の怪我は我が身につまされる思いであった。そのため何とか事故をなくそうと、全山あげての保安運動や事故の防止を炭鉱の神々に祈ったのである。

(四)、保安運動、安全祈願

鉱山保安法が昭和二十四年制定されて以来、事故の少なかった優良炭鉱が毎年国家表彰をうけることになった。当鉱も他炭鉱に負けずに保安運動に力を入れ、毎月はじめの一番方入坑前に坑口に祭壇を設け所長以下関係者総出で集まり神主が祝詞を山の神にさゝげ、安全祈願を行って事故の無いことを祈った。又労使双方による保安委員が坑内外保安巡視点検を行い事故の防止に努めたので、職場の環境もよくなり、昭和二十七、八年頃には優良炭鉱としての栄誉をうけたこともあった。

毎年七月一日より一週間程度全国鉱山保安週間が催され、その時には筑豊各炭鉱の代表が添田町の英彦山神宮に集まり盛大に安全祈願祭が行われた。その行事の一環として写真のように平素は入坑禁止になっている女性主婦の坑内見学を実施して、勤労の苦労を分ちあい、仕事をつゝがなく終了して昇坑した従業員に湯茶、煙草などの接待が行われ今月の無事を喜び合った。

年に一度は山神祭があり、二～三日全山休暇をとり、労使ともども鉱山一家としての雰囲気の中、山神社の神前に額づき炭鉱の安全を祈った。各地から見世物興業や出店が立ち並び子供は晴着を着飾ってお祭りを楽しんだ。

職場対抗の運動会やグループ毎の宴会が社宅内各所で行なわれ、労働の喜びと無事故で迎えたお祭りを祝い、夜おそくまで炭鉱全山あげて賑わった。

しかし炭鉱の事故は常に隣りあわせである。人々は神に祈り其の平安を素朴な気持で求めた。

炭鉱に生活する人々の絆は強く、お互いに助け合い飾り気の無い人間の暖かいつきあいが世間一般に比較して非常に強く、独特の炭鉱労働者の気風を形成していた。後年炭鉱閉山後都会に転職して行った人々の中には、貧しくともお互いに助けあって生活していた炭鉱生活をなつかしみ、都会生活の無情さに再び筑豊の地に帰ってきた人々も多かった。

今閉山した各炭鉱の山神社の御神体はその元締の四国大三島の大山祇神社へ返還され、往時の山神社は殆んど廃霊と化した。それを守り

神として生活した炭鉱夫の姿の大半は無く、神社のまわりは雑草が生い茂る許りである。

保安週間中の主婦の坑内見学、古河大峰炭鉱坑口繰込場にて（昭和35年7月、帽子は鉄製にかわっている）

七、エネルギー革命と機械化、合理化

(一)、其の背景

石炭産業は敗戦後の重点傾斜生産により、日本復興の原動力となったが、経済の高度成長はより安価に安定供給され　然も効率のよい石油等のエネルギーを求め転換して行った。二十年代後半から三十年以降一転して我国の石炭業は斜陽の道を辿りはじめた。

戦後の民主化労働運動は労務費の増大を招き、又経済の復興と共に労働力も工業地帯に流れ、熟練作業員が不足する中で外国の廉いエネルギーに対抗するためには、機械化、合理化は必然の勢いとなった。朝鮮事変終了後の二十六～七年より欧米の炭鉱機械の導入による炭鉱の必死の生残りの作戦が展開されはじめたのである。

(二)、機械化、合理化の推進

採炭切羽は従来の木柱から鉄柱に切替えられ、その鉄柱はとりはずしては何回も使用されたゝめ、坑木の使用量は激減した。又パンツアーコンベヤーによるカッペ採炭という方式がドイツから導入され、石炭を切りくずすのに爆薬の他ドラムカッターなどの強力な載炭機が入った。切羽で切り崩された石炭は自然にコンベヤーによって坑外に連続的に搬出されるなどその効率化は眼を見張る程であった。

私たち採炭エンジニヤーは採炭機械化係にまわされ、新しく開発された諸炭鉱を見学し、技術を交換しあってその機械化の推進に努力した。

坑道の掘進にも大型の積込機械が導入され坑内の骨格構造の改善のための立坑、運炭ポケットの設定その他あらゆる面における機械化、合理化が生き残るために要求され、必死の努力を傾注した。

しかし如何せん、日本の炭鉱の坑内条件、特に勤務していた筑豊炭田にある炭鉱は、どこも断層が多く機械化がはばまれ、明治以来の長い年月の採掘によって採炭切羽は地下深く老朽化し、その上採掘に伴う地上の沈下は人家や田畑の密集している筑豊では、鉱害被害が大きく、その補償は炭価に大きくはねかえるなど悪条件が重なり、遂にエネルギー革命に抗すべくもなく、衰退の一途を辿った。

八、炭鉱の終焉

昭和三十七年四月、遂に当大峰炭鉱は閉山し最後のあがきとして、事業を縮少し第二会社として操業を続けた。それも長く続かず四十四年炭鉱の歴史を閉じた。

当炭鉱の第二会社移行時、私はその職責から上司の指示により、職員層の採鉱技師の内転換出来るものは夫々転属を云い渡した。

機械部門に配転された者は、ゆく先の苦労も分らず手をたゝいて喜んだ。ある者は未だ操業している他の同系の炭鉱に配置された。この人たちは、その不運を嘆いた。採炭技師が操業中の炭鉱に転勤になるのは、本来なれば喜ぶべきことであるに拘らず、この頃には炭鉱以外しか知らない若い技術者でさえ、エネルギー革命に何れ抗しきれず再び閉山に遭遇するのであろうということを肌で感じとるようになっていた。

電気係のK君は社宅も隣同志で親しくしていた。昭和三十年代の中頃であったろうか、公休日を利用した斜坑人車捲揚機のロープの天地振替作業で捲上機に巻いてあるロープをほどき、反対側の端から巻き直して、ロープの寿命をのばす作業の折、思いがけなくロープの締付がゆるみ炭車が暴走した。偶々坑底で待機していた同君はその事故にまきこまれ、頭部から顔面にかけて数十箇所を縫合するほどの重傷を受けた。炭鉱はどこで事故にあうか分らない。歩道を歩いている通行人の中にダンプトラックが突込んでくるようなものである。長い長い病院生活の中で彼は家族と同僚の献心的な看護と、其の強い意志で奇跡的に健康をとり戻した。

そして大きな怪我を経験しながら再び坑内の電気係員として石炭生産の使命に燃えて活躍した。しかし当鉱の閉山は大きなショックであったに違いない。この人生の大きな節目にK君は転換を決意し上司、同僚の引とめに拘らず阪神地方のある学校の教師としての道を選んだ。三十代で全く変った道への転進は非常に決意を要することである。彼は持前の頑張りで見事その苦難の道をのり越え、今は生活の基盤も確立し、若い後輩の指導に活躍している。今秋偶々大阪に所用で立寄ったとき二十年振りに再会し、元気な彼の姿に接し石炭生活時代の若き日の思い出を語りあった。苦しい事も今では懐しい記憶としてよみがえり、お互いに今日の無事を喜びあったことである。かくも閉山は、夫々の人生航路に様々な波紋を投げかけた。

一通りの仕事の跡片付が終ったころ、私は同系の北海道の雨竜炭鉱に転勤を命ぜられた。当時の北海道は昭和三十年頃の筑豊炭田の感じであった。石炭貨車は大手を振って貨物の主力を支え、汽車の中の暖房にも未だ石炭ストーブが使用されていた。

しかし転属して上司に挨拶に行ったところ、誠に申訳ないが半年後は閉山の予定であることを耳うちされた。この時のやるせない思いは未だに忘れることが出来ない。K君と同様私も転換を決意した。しかしふんぎりがつかぬまゝ時が流れた。

この頃から、北海道の炭鉱も条件の悪いところは閉山がはじまり、転属先の炭鉱も半年後には閉山、第二会社に移行し、その後五年程で姿を消した。私は雪の中であけくれた数年間の苦い勤務の思い出を胸にひめて、家族と共に四十一年頃再び九州に舞い戻り石炭無きあとの鉱害処理業務等の仕事に十余年の歳月をすごし、最後まで石炭と運命を共にした。今その業務から離れて数年になる。

昭和四十八年筑豊の坑内掘の炭鉱は貝島大之浦炭鉱を最後に完全に筑豊炭田から姿を消した。かくて明治以来八億五千万噸余がこの地で掘り出され、日本近代化に大きく貢献したが、地下には未だ約十五億噸の石炭が再び日の眼を見ることもなく永久の眠りに入った。地上には其の墓標と云われる硬山のみが過去の栄華を物語っている。

採鉱技師達も、一般労働者と同様、閉山と共になれない他の職種に転換していった。私は硬山を眺めるたびに石炭と共に歩んだ人生をほろ苦く思い出しそして、遂の住処と定めた第二の故郷としての筑豊の将来をしみじみと思いめぐらす昨今である。

若い時石炭増産の国家的使命に焼えて石炭界に身を投じたクラスメート二十余名の内、現在石炭の生産に関係しているのは、九州西部の海底炭鉱に勤務している友人唯一名にすぎない。

九、おわりに

石炭百年の歴史のうち、敗戦後の石炭増産からエネルギー革命によって閉山に追い込まれた四半世紀の記録を述べたが、今またエネルギー危機によって再度石炭が見直されはじめているのは誠に皮肉である。今後のエネルギーはどのような形で移行するのであろうか。国家の経済を支える基本となるエネルギー確保の見通しは、国をあげて取り組むべきであろう。

石炭の衰退の過程において、政治、資本、労働、科学技術、地域社会、一般産業界それぞれの立場のみを強調して推移し、急速な閉山により地域経済へ大きな打撃を与た感がしてならないが、もっと国の施策としてエネルギー問題の長期的な取り組みによる政治が行われるべきではなかったろうかと思うのである。

それが故に日本経済の進展に大きな役割を果して姿を消して行った石炭産業の歴史は、あらゆる面で、このエネルギー危機の高まりの中において、かって石炭産業にかゝわりを持った人々の生存している間に記録を残し、研究し後世への教訓として残すべきであろう。

我が石炭産業に従事した記録はその殆んどが、エネルギー革命の波に洗われて敗退を強いられた石炭産業衰退の、重くるしい苦悩の道のりであり、消えゆくものへの挽歌でもある。

そして思い出の中で先ず強く浮んで来るのは矢張り石炭産業で貴い命を失ない、又は怪我をした同僚や同志のありし日の坑内で懸命になって石炭層に立ち向った雄々しい姿である。従ってこの記録にはその思い出を多く語ったが、この文が鎮魂の詞ともなればと願わずにはいられない。

今筑豊炭田からすべて炭鉱が消して十年余石炭産業の日本経済に果した役割と、諸外国に比してその炭層条件の劣悪さからくる過酷な作業条件の数々を思うとき、敗戦後日本経済が高度成長を遂げ、各産業が繁栄するのを横目で眺めながら 第一次産業の宿命であろうか、徹退を続け遂に閉山し、同志夫々離散せざるを得なかった戦後の三十年の苦難の道を、今更のように苦々しく思い出すのみである。

唯敗戦後の日本復興の礎を我々石炭産業に従事した者がつくり上げたのだと、ちょっぴりと自負心を奥底に抱きながら・・・。

最後にこの記録については、殆んど文献など資料を使わず現在の記憶をもとにつて記述したので、年代その他の点に多少の誤りがあるかと思うがその点は了承されたい。

この拙文がすこしでも戦後の炭鉱の実情を知る手掛かりとなり、又石炭産業に従事した人々の苦労を認識して戴くよすがともなれば筆者の喜びはこれに過ぐるものはない。